

# 歴史の散歩道

## 関戸～寄り道

鎌倉時代からの戦いと  
人々の歴史が残る  
「関戸」の街を歩く



企画・発行：せいせき観光まちづくり会議

多摩市関戸 2-24-14-304 (桜ヶ丘商店会連合会事務局内)

文献引用：パルテノン多摩、多摩市教育委員会 教育振興課文化財係、  
関戸熊野神社、多摩古街道団 (宮田太郎氏)、国土地理院、多摩川流域懇談会

本冊子は、令和5年度公益信託多摩まちづくりファンドの助成を受けて制作しました。

# 目次

関戸の歴史年表	5
① 関戸の歴史	8
② 新田義貞の鎌倉攻めと関戸合戦	10
③ 横溝八郎の墓	12
④ 安保入道親子の墓	14
⑤ 地藏菩薩像(関戸古戦場跡)	16
⑥ 天守台跡(関戸城跡)	17
⑦ 熊野神社(霞ノ関南木戸柵跡)	18
⑧ 金比羅宮	22
⑨ 観音寺(相澤伴主の墓)	24
⑩ 徳川家康と「御尊柩御成道」	26
⑪ 「聖蹟」の由来	28
⑫ 明治大正昭和期の皇室と多摩川の鮎漁	30
⑬ 地名と屋号から見る関戸の関・宿・市	32
⑭ 関戸の渡しと関戸橋	36
番外編	
・多摩川と関戸	38
・大栗川と関戸	39

## A~K 歴史スポット

(詳しい説明は、本文に掲載)

桜	トイレ	交番	歩道
梅	郵便局	病院	山道
いちよう	学校	銀行・信金	川、水路
紅葉	神社	寺	公園、緑地
		車道	

# せいせき歴史MAP



旧鎌倉街道沿いには、鎌倉時代~江戸時代の歴史の跡が多数残っています。

明治天皇の御休所として使われた旧富沢家。建物は多摩中央公園に移築・復元されましたが、記念碑がここにあります。

# ごあいさつ

## 「歴史の散歩道 関戸～寄り道」 発刊にあたり

私たち「せいせき観光まちづくり会議」は、2005年に聖蹟桜ヶ丘のまちの活性化を目的に結成された市民団体で、商店主・大学生・社会人で構成されています。

聖蹟桜ヶ丘駅周辺がモデル地とされたスタジオジブリ制作のアニメ「耳をすませば」のファンが全国から訪れるため、“おもてなしの精神”で関連イベントを企画したことがきっかけで、私たちの活動がスタートしました。

「耳をすませば上映10周年記念上映会」、「せいせきハートフルコンサート～耳をすませば」（毎年秋開催）、「散策マップによるスタンプラリー」（常時開催）など、17年間にわたり様々なイベントを続けてきました。

その他、昔から桜の名所でもあるこの地の「桜を使った特産品の開発」も行い、販売しています。

さらに、聖蹟桜ヶ丘駅周辺の歴史観光スポットをめぐる「聖蹟桜ヶ丘駅発まち歩き三部作（関戸編、一ノ宮編、連光寺編）のパンフレット」を作成し、来街者に配布しています。

今回は、その中の「関戸」の歴史に注目し、この冊子にまとめてみました。生まれ育った「関戸」が、鎌倉時代から歴史に登場し、関戸を南北に貫く「鎌倉街道」において要衝の地であったことが、よくわかります。

皆さんがこの冊子を手にして関戸を巡り、先人たちが築いてきた歴史を思い起していただけたら、嬉しいかぎりです。

令和5年（2023）11月

せいせき観光まちづくり会議

## 関戸の歴史年表

	和暦	西歴	月日	事項	参考文献
鎌倉時代	建久3年	1192	春	観音像を唐の僧が持って来て、草堂に安置する。（ <b>観音寺</b> の始まり）	『関戸合戦』
	建久4年	1193	3月下旬	<b>源頼朝</b> が、上野国や下野国の狩倉を見るため、鎌倉を出発、武蔵野国多摩郡 <b>関戸</b> に宿泊する。横山氏が警護する。	『関戸合戦』
	建久5年	1194	6月13日	<b>虎御前</b> 、曾我兄弟の一周忌法要の後、信濃国善光寺へ参る途中、武蔵国多摩郡 <b>関戸宿</b> に着く。	『関戸合戦』
	建保元年	1213		<b>霞ヶ関</b> 木戸柵が出来る。軍事的な関の柵とされ、南北朝の終わり頃には軍事柵としての役割を終える。鶴ヶ岡八幡宮、後北条氏の関所を経て、天正18年（1590） <b>豊臣秀吉</b> により廃止される。	
	正安3年	1301	8月上旬	明空により編集された『宴曲抄』に、「 <b>霞ノ関</b> 」などの記載がある。	『関戸合戦』
	元享2年	1322	8月	<b>関戸</b> の阿弥陀三尊來迎画像板碑が建立される。	『関戸合戦』
南北朝時代	元弘3年	1333	5月16日 5月22日	幕府方大将・ <b>北条泰家</b> が、 <b>新田義貞</b> と武蔵野国多摩郡分倍河原・ <b>関戸</b> に戦い、破れて鎌倉に退く。戦の際、北条泰家を守り奮戦した鎌倉武士の <b>横溝八郎</b> 、 <b>安保入道親子</b> らが討死する。北条一族が東勝寺で自害。ここに鎌倉幕府が滅亡する。	『関戸合戦』
	文和元年	1352		武蔵野合戦。関戸にも陣がおかれる。	『関戸合戦』
室町時代	永享10年	1438		永享の乱。関戸にも陣がおかれる。	『関戸合戦』
	延徳元年	1489	9月9日	<b>熊野神社</b> 創建される。	『関戸合戦』

	和暦	西歴	月日	事項	参考文献
室町時代	弘治元年	1555	1月11日	松田盛秀が、有山源右衛門尉に <b>関戸宿</b> の間屋を申し付ける。	『関戸合戦』
	永禄7年	1564	9月20日	北条氏政が、武蔵国多摩郡 <b>関戸郷</b> の市のおきてを定める。	『関戸合戦』
安土桃山	天正18年	1590	4月	<b>豊臣秀吉</b> が、武蔵国多摩郡 <b>関戸郷</b> に禁制を下す。	『関戸合戦』
江戸時代	元和3年	1617	3月	<b>徳川家康</b> の霊柩が、久能山から日光に移送される。 <b>関戸</b> は、人馬の継立を求められた。一行は小野路宿から <b>関戸</b> に入り、多摩川を渡り府中御殿に入る。伝承地に祠（金山大権現）が建てられている。	『関戸合戦』 『府中御殿』
	慶安3年	1650	春	<b>観音寺</b> の中興。	『関戸合戦』
	元禄15年	1702		賦国上人が、 <b>延命寺</b> を開く。	『関戸合戦』
	天明元年	1781	7月	<b>観音寺六観音</b> が、相沢了栄・井上与一を施主として建立される。	『関戸合戦』
	天明6年	1786		<b>熊野神社</b> 本殿建立。 棟札に、願主・相澤源左衛門休郭の名がある。	『関戸合戦』
	文化14年	1817		<b>金毘羅宮</b> （琴平社）上棟祭。	『関戸合戦』
	文政2年	1819		<b>相沢伴主</b> 、「 <b>関戸旧記</b> 」執筆始まる。（～天保7年（1836））	『関戸合戦』
	文政10年	1827		<b>相沢伴主</b> により、いけばなの流派「允中流」が創始される。	『関戸合戦』
	天保5年	1834	7月	『江戸名所図会』が刊行される。当時の観光ガイドブックのようなもの。関戸、横溝八郎ハカ、天守台の記載がある。	『関戸合戦』
	弘化2年	1845		<b>相沢伴主</b> ・長谷川雪堤により『 <b>調布玉川惣画図</b> 』が完成する。	『関戸合戦』
	元治元年	1864	8月	現・ <b>九頭龍神社</b> 所蔵の「吉富庄」銘の太鼓（熊野神社旧蔵）がつけられる。	『関戸合戦』

	和暦	西歴	月日	事項	参考文献
明治時代	明治14年	1881	2月20日	<b>明治天皇</b> 、連光寺村に行幸。ウサギ狩り（狩猟）午後1時から5時まで（兎5羽猟獲）。富沢家（連光寺の名主宅）が、天皇陛下のお休み所となった。	『みゆきのあと』
	明治15年	1882	6月2日	<b>明治天皇</b> 、連光寺村に行幸。玉川（多摩川）にて鮎漁天覧。玉川の漁法は、長良川などの鮎漁とは異なり、鶺鴒が川に入り鶺鴒を操りながら魚を捕る「徒鶺鴒（かちうかい）」と呼ばれた。	『みゆきのあと』 『聖蹟と鳥獣』
	明治17年	1884	3月	<b>明治天皇</b> 、連光寺村に行幸。連光寺村御猟場にて、兎猟天覧。	『みゆきのあと』
	明治22年	1889		戸町役場になっていた旧・ <b>相沢邸</b> が、多摩村役場として使われる。	多摩村誌
大正	大正2年	1913	8月7日	<b>裕仁親王</b> （昭和天皇）、多摩川にて鮎漁行啓。	『聖蹟と鳥獣』
	大正14年	1925	3月24日	玉南電車（京王線の前身）府中～東八王子が開通。 関戸橋鉄橋（単線）開通。	京王電鉄社史
昭和	昭和3年	1928	5月22日	京王線 新宿～東八王子 直通運転開始。	京王電鉄社史
	昭和12年	1937		<b>関戸橋</b> が開通する（関戸の渡しが廃止される）。	〃
			5月1日	<b>関戸駅</b> が <b>聖蹟桜ヶ丘駅</b> に改称される。	〃
	昭和61年	1986	3月28日	<b>聖蹟桜ヶ丘ショッピングセンター</b> 開業。	〃
平成	平成24年	2012	4月8日	聖蹟桜ヶ丘駅ホームに、電車接近メロデーとして <b>カントリーロード</b> が流れる。	
	平成30年	2018	秋	<b>旧関戸橋</b> 撤去工事始まる。	
	平成31年	2019		聖蹟桜ヶ丘駅北地区区画整理事業道路整備終了	

# 1 関戸の歴史

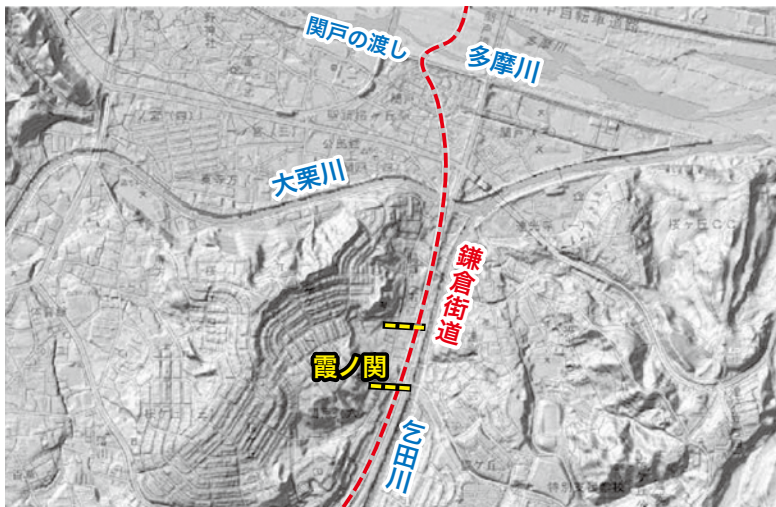
## 関戸の発展

関戸では、たびたび合戦が行われたり、陣が置かれてきました。その背景には、関戸が鎌倉街道上ノ道沿いという交通の要衝にあった点も大きかったと思われます。そのため、関戸には関所が置かれました。関戸の地名も「関所」が設置されたことに由来すると言われてています。

関戸の関所に関する最も古い記述は、鎌倉時代末頃の成立といわれる『曾我物語』です。建久4年(1193)に上野・下野の狩場を見るために鎌倉を出発した源頼朝は、「関戸宿」に宿泊します。そのエピソードと合わせて、かつて平将門がここに「関戸」を立てたものの、討伐に来た藤原秀郷が「霞ノ関」と名付けて打ち破った古事が記されています。

また、『関戸文書』(有山文書)(多摩市指定文化財)からは、戦国時代の関戸には、関銭を徴収する関や、商人や参詣者を止める宿があり、さらに月に6回、市も開かれていたことがわかりました。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』



鎌倉街道と霞ノ関の推定位置

図：「第5回 多摩川流域歴史セミナー資料(2017)」多摩川流域懇談会から引用

## 鎌倉街道

各地から鎌倉へ向かう中世の古道の総称を「鎌倉街道」といいます。「太平記」<sup>ばいしやうろん</sup>「梅松論」<sup>かみのみち</sup>にみられる「上ノ道」<sup>なかのみち</sup>・「中ノ道」<sup>しものみち</sup>・「下ノ道」の三道が主なものと言われており、関戸は、このうち「上ノ道」に位置していました。  
※上道、上ノ道は諸説あります。



図：「鎌倉街道伝説」宮田太郎(2001)から引用

## 2 新田義貞の鎌倉攻めと関戸合戦

「関戸合戦」を含む「新田義貞の鎌倉攻め」の様子は『太平記』という軍記物語に語られています。

### ■ 分倍河原合戦

上野の国(今の群馬県)の武将・新田義貞は、後醍醐天皇側からの命令を受け、元弘3年(1333)5月8日鎌倉幕府を倒すため兵を挙げました。

新田軍は、鎌倉街道上ノ道に沿って兵を進めます。対する鎌倉幕府軍は、5月9日に鎌倉を出発。両軍は、小手指原(入間市)久米河(東村山市)にて衝突し、5月15日に武蔵国府のある府中に至ります。

15日、16日の2日間にわたって、分倍河原では激しい戦いになりました。一度は苦境にたった新田軍でしたが、近隣からの応援を受け、分倍河原で再決戦にのぞみ、鎌倉幕府軍を打ち破ります。

### ■ 関戸合戦

分倍河原戦で敗走した幕府軍は、多摩川を越え、関戸付近で激しい掃討戦により、多くの人々が討死していきました。

大将である北条泰家が関戸付近で討たれそうになりますが、弓の名手・横溝八郎が踏みとどまり、新田軍を次々に射落とし奮戦しますが最後は討死します。

また、安保入道父子ら多くの家臣が討死を遂げる中、北条泰家は無事鎌倉に逃げる事が出来ました。

新田軍は17日まで関戸に留まり、その後一気に鎌倉に向かいます。18日に鎌倉で戦が始まり、22日に北条一族が東勝寺で自害をし、ここに鎌倉幕府は滅亡することになったのです。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』



多摩市史編集委員会1997『多摩市史通史編 I』、峰岸純夫2005『新田義貞』、山本隆志2005『新田義貞』をもとに作成。

パルテノン多摩 2007『関戸合戦』 p.8 より転載 (本図作成時の参考文献名は図内に記載)



横溝八郎の墓（八郎塚） パルテノン多摩撮影（『関戸合戦』 p.11 より転載）

### 八郎塚とは

『太平記』で討死が伝えられる横溝八郎の墓とされる古塚です。『関戸旧記』や『郊遊漫録』には、大小の塚のうちひとつが横溝八郎の墓であるとされています。

『関戸旧記』では大きな塚を「山伏塚」と呼び、小さな塚を横溝八郎の墓としていますが、『郊遊漫録』では逆としています。

塚の頭頂部には祠が建っており、祠の中には、現在でも位牌が置かれています。

### 横溝八郎とは

北条泰家の家来で、関戸合戦では泰家を守り奮戦、この間泰家は尾根伝いに鎌倉に敗走したと言われています。

弓の名手でしたが、この戦いで関戸の地で討死しました。

藤原南家\*工藤氏の一族とされ、得宗被官\*でした。

### 横溝八郎の位牌

昭和 28 年（1953）の関戸合戦の六百二十回忌に際して作られたものです。施主は「関戸古戦場戦死者慰霊祭執行同志会」であり、地元有力者が名を連ねています。

※藤原南家・・・藤原氏の一流のこと。

得宗・・・北条家の当主のこと。

被官・・・家臣のこと。

「得宗被官」とは、北条家の家臣の学術用語である。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』（注・コラムを除く）

### コラム

#### 三ヶ月湖(?) は天然氷のスケートリンク

昭和 20 年代、大栗川の蛇行した部分が改修され直線になり、跡の川筋は三ヶ月の形に残りました。

冬になると、その部分は多摩丘陵の北のヘリにあたるため、一日中太陽が当たらず氷が厚く張りました。冬の間は溶ける心配がなく、地元の子どもたちのスケートリンクに早変わり。

当時は、スケート靴など誰も持っていません。そこで考え出されたものが、竹林から切り出した孟宗竹を太めに切り、火にあぶって曲げて足の大きさに合わせて型を直し、穴を開けて紐を通した、手作りのスケート靴でした。

今では考えられませんが、当時の子どもたちは、自然の中で、色々な工夫をしながら遊んでいました。





安保入道親子の墓 (入道塚)

パルテノン多摩撮影 (『関戸合戦』 p.11 より転載)

## 入道塚とは

『太平記』で討死した安保入道親子<sup>あ ぼ に ゆ う ど う</sup>\*の墓と伝えられています。かつては関戸村の名主・相沢氏の宅地内にありました。柏かや (あるいは榎の木)が墳墓上にありましたが、文政頃(1818~1830)に枯れてしまったそうです。宅地の主で文人でもある相沢伴主によって、安保入道の墓と推定されました。祠は、伴主の子が建立したものです。

注) 個人敷地内にあるため、見学不可

## 安保入道とは

横溝八郎とともに関戸合戦で討死した鎌倉北条の武士。関戸合戦で父子ともども討死する安保入道は、不明な点の多い人物です。

法名<sup>ほうみょう</sup> \*も『太平記』では「道堪」、『梅松論』では「道潭」など表記にバラつきがあり、確定していません。実名も「四郎左衛門宗頼<sup>しろうさ えもんむねより</sup>」、<sup>しんざ えもんじょうつねやす</sup>「新左衛門 尉 経泰」説があるものの不明です。安保氏は武蔵国賀美郡安部郷 (埼玉県児玉郡神川町元安部) をルーツとする得宗被官で、<sup>とくそう ひかん</sup>丹治姓の一族です。安保入道は本宗家<sup>ほんそうけ</sup> \*の人物と見られ、中先代の乱で子息が自害<sup>みつやす</sup>して断絶したため、死後に残された領地は、足利方の分家・安保光泰に継承されます。

※入道・・・仏門に入ること。侍は明日の命が分からないから仏に帰依していたのかもしれない…とも考えられる。

法名・・・仏弟子となった際にもらう名前のこと。

宗家・・・一族における本家のこと。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』(注・コラムを除く)

## コラム

### 多摩川での水泳

昭和 20 年～ 30 年代当時は学校にはまだプールがなく、近くを流れる多摩川が自然のプールでした。

都民の飲み水の水源といわれる「小河内ダム」が出来る前で、その頃の多摩川の水流量は今よりもずっと多く、子どもの水泳場所にはぴったりの場所でした。

特に関戸橋下の橋脚のそばは、泳ぐ者にはたまらない場所でした。水は清く澄んでいて魚も川底の砂利もはっきりと見えるほどでした。

家を出る時に小さめのスイカを持ち、川に入れて冷やして、泳ぎ疲れた体を太陽にあてて温め、冷えたスイカをロー杯に入れて楽しんだものです。





## 5 地蔵菩薩像 (関戸古戦場跡) MAP P.3 ①



地蔵菩薩像 (関戸古戦場跡)

### ■ 地蔵菩薩像

鎌倉街道沿いの遠藤地蔵堂内にあり、丸彫立像・像高 125 センチ、最大幅 42 センチ、蓮台高さ 19 センチ・直径 45 センチ、裏側には「関戸村寛文三年卯七月日念仏講中」と記されています。

裏手には横溝八郎の墓と延命寺があり、地蔵尊は「下の地蔵」と呼ばれます。「上の地蔵」は、熊野神社の入口南側にあります。

市内で一番古い地蔵です。毎年十月十四日に関戸の第三・四組の女性が集まり念仏を唱えるそうです。そばに「永代融通念仏盟約塔」えいたいゆうつうねんぶつめいやくとうがあります。旧位置は、現在地の左側にあったといわれています。

この地蔵菩薩像が立つあたり一帯が、関戸古戦場であったと伝えられています。

出典：「第 5 回 多摩川流域歴史セミナー資料 (2017)」多摩川流域懇談会

## 6 天守台跡 (関戸城跡) MAP P.3 ②

### ■ 天守台とは

桜ヶ丘一丁目の金毘羅宮付近を「天守台」といい、一帯の山を「城山」ともいいます。多摩川に面し、武蔵野台地を一望できる絶勝の地であることから、鎌倉幕府以来の物見台的城塞として、敵を察知したり、急変を狼煙<sup>のろし</sup>などで知らせる通信拠点であったとも考えられます。

一帯は「関戸城跡」とされていますが、今はわずかにその一部を留めるのみで、山頂は削られ地形も変わっています。

元弘三年 (1333) の新田軍鎌倉攻めの関戸合戦では、一帯が戦場と化し、義貞軍が北条泰家軍を敗走させた後、陣をこの高い場所に置いた後であることから「天守台」と言われるようになったとも伝えられています。

その後は、武蔵野合戦 (1352)、永享の乱 (1438)、明応三年の戦い (1494) など多くの軍勢が往来しました。地形が険しく、敵を防ぐことに適している場所として、長い間、幾多の戦乱を体験してきました。



天守台付近の様子

パルテノン多摩撮影 (『関戸合戦』 p.11 より転載)

出典：「第 5 回 多摩川流域歴史セミナー資料 (2017)」多摩川流域懇談会

7 熊野神社(霞ノ関南木戸柵跡) かすみのせきみなみき ど さくあと MAP P.3 ©



熊野神社本殿  
(2022年 改修)



熊野神社棟札 (表・裏 各1枚)  
熊野神社所蔵/パルテノン多摩撮影  
(『関戸合戦』 p.48 より転載)

熊野神社とは

この熊野神社は、市内に現存する中で最古の本殿を持っている、大変歴史のある神社です。

熊野神社本殿の創建年代は、残された棟札により判明します。熊野神社には天明6年(1786)、元治元年(1864)、明治25年(1892)の棟札と天明6年の寄付者の名を記した木札が残されています。天明6年の棟札には「御宮建立願主 名主 相澤源左衛門休郭」の名があり、相沢五流が建立を願い出た人物であったことが分かります。

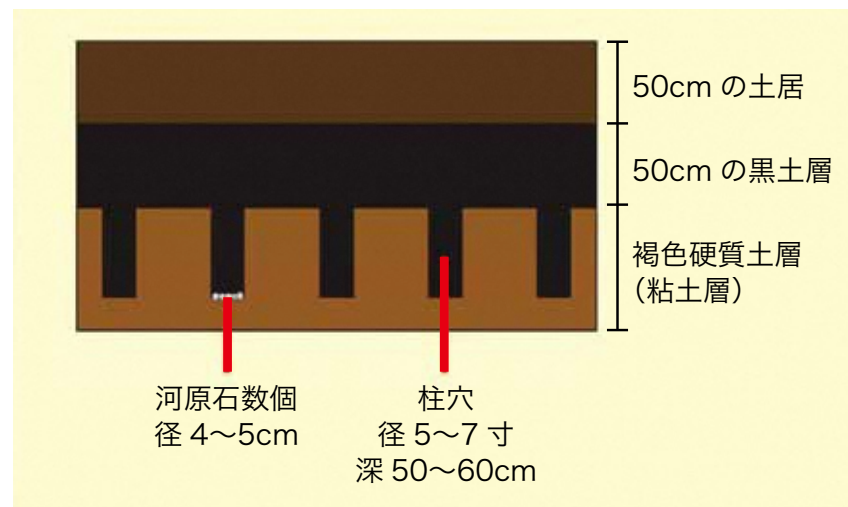
また、天明6年の木札には50名近くもの寄付者の名前が記されており、多くの村人の寄付によって建立されたことも見えてきます。なお、天明6年という年は、天明の飢饉の最中でもあり、熊野神社本殿を立てる契機となった可能性も考えられます。

霞ノ関南木戸柵跡(東京都指定史跡)の発見

昭和34年(1959)の菊池山哉らによる『東京都多摩丘陵文化財総合調査』で、熊野神社境内の土居から、柱穴が見つかりました。

赤粘土層の中に1尺5寸の間隔で直径5~7寸くらいの黒土柱穴16本が点々とあったとされます。

柱穴の深さは平均50~60cmほど。最下部に4~5cmの川原石を敷き詰めたものもありましたが、柵の木材は残っていませんでした。



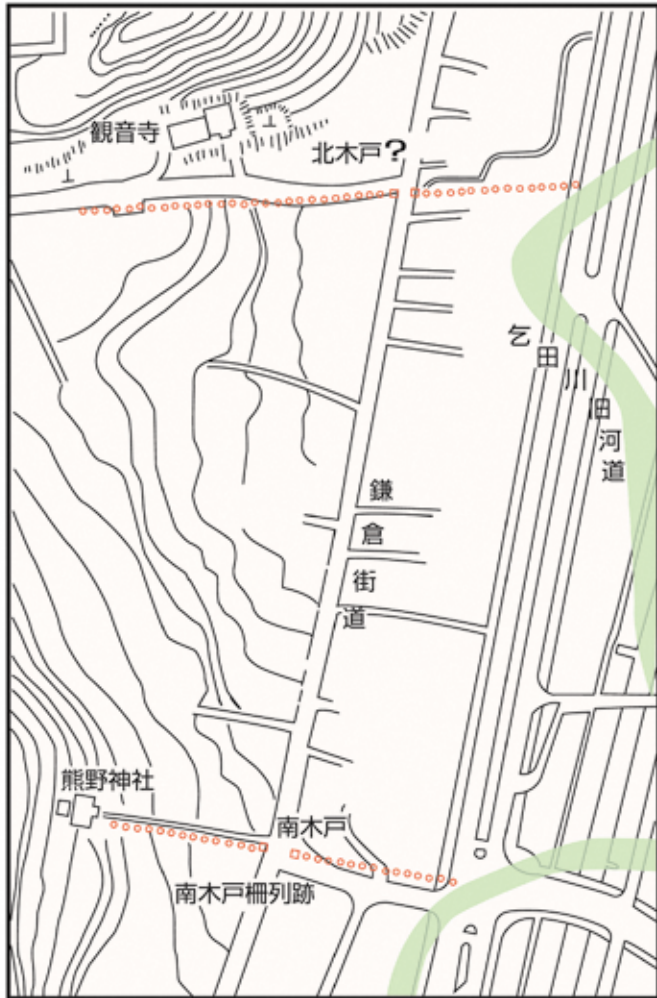
柱穴の模式図 パルテノン多摩 2007『関戸合戦』 p.28 より転載

また、東側の乞田川付近の畑を掘ったところ、そこからも6~10の柱穴が見つかったため、直線的に続く、関所の柵跡(霞ノ関南木戸柵跡)という推論が出されました。この霞ノ関南木戸柵が「関戸」の由来になっているとされます。

また、北側の柵列は、現在は暗渠※になっている関戸川に沿った観音寺の南側に設けられていたと考えられています。

※暗渠・・・水路に蓋をする方法。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』  
(末尾2行は、「第5回 多摩川流域歴史セミナー資料(2017)」多摩川流域懇談会より引用)



『多摩市史通史編Ⅰ』より作成

霞ノ関南木戸柵跡想定図

『多摩市史通史編Ⅰ』をもとにパルテノン多摩作成(『関戸合戦』p.28より転載)

菊池は、『吾妻鏡』建暦3年(1213)10月18日条の「新関」を「露ノ関」のことだと推測し、それをもって木戸柵の年代を鎌倉時代初期としています。その説には反論も多く、遺構<sup>いこう</sup>の年代を比較して定めるには課題が残っています。

精密な発掘調査など、更なる検証が必要ですが、このような「柱穴」の存在は興味深い事実と言えます。

これらは、鎌倉時代の建暦3年(建保元年・1213)に鎌倉街道に設けられた軍事的な関の柵跡とされます。その後、南北朝の終わりころには軍事柵としての役割を終え、鶴岡八幡宮や後北条氏の関所(関<sup>せき</sup>銭徴収)を経て、天正18年(1590)の豊臣秀吉による北条氏滅亡により廃止されたと考えられます。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』  
(末尾5行は、「第5回 多摩川流域歴史セミナー資料(2017)」多摩川流域懇談会より引用)

※遺構<sup>いこう</sup>・・・昔の構築物(の一部)が地面や地中に残った跡  
昭和36年度には、「霞ノ関南木戸柵跡」は東京都指定史跡となりました。



↑ 霞ノ関南木戸柵跡  
(写真の列柱は復元したもの)

↑ 階段を登った先が、熊野神社



再建された金比羅宮  
(昭和 43 年)



火災により消失した金比羅宮跡  
(昭和 39 年)

パルテノン多摩『関戸合戦』より転載

### こんぴらぐう 金比羅宮の歴史

新田義貞が関戸合戦の際に逗留した「城山」「天守台」と呼ばれた場所にある金比羅宮（こんぴらぐう 琴平社・ことひらしゃ 金刀此羅社）。ここは、江戸時代には、多くの人が訪れる「名所」でもあったようです。

金比羅宮を誕生させたのは、関戸の名主・井上林蔵です。大山（伊勢原市）の宮大工・手中小明王太郎てなかみょうおうたろうにより、文化 10 年（1813）に請け負われ、同 14 年（1817）にかけて創建されたことが古文書から判明しています。

江戸時代の金比羅宮は『江戸名所図会』に描かれたほどで、関戸のひとつの名所であったようです。金比羅宮の誕生は関戸に新たな名所を創出したといえるでしょう。

当時の社殿は、『江戸名所図会』のほか、昭和 20 年代の写真で屋根を確認できる程度ですが、昔を知る方々は「立派な彫刻のある社殿だっ

た」と伝えています。

しかし、昭和 33 年（1958）6 月 12 日の夜、住み込んでいた何者かの火の不始末により火災にあい、社殿は全部焼失してしまいました。

ちょうどその頃、この付近一帯が京王帝都電鉄（当時）による桜ヶ丘団地の開発が進んでいました。金比羅宮もその造成の影響で移転・再建することになり、昭和 41 年（1966）、桜ヶ丘団地の宅地造成完了段階において現在地に再建され、翌昭和 42 年（1967）4 月 10 日に遷座せんざの儀ぎが行われました。

### ■ 金比羅宮の「物見松」

開発前までは「物見の松」と呼ばれる大きな黒松が境内の左手にあり、絶景の場として江戸時代から有名でした。



物見松の様子

新倉勇造氏撮影/パルテノン多摩『関戸合戦』p.10 より転載

戦の際に多摩川や府中市の様子を偵察したことから「物見松」と言われたそうです。

現在は、切り倒されてなくなってしまいました。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』

うち一部は、「第 5 回 多摩川流域歴史セミナー資料（2017）」多摩川流域懇談会より引用。  
(注・コラムを除く)

### コラム

#### アニメの舞台になった金比羅宮

1995 年にスタジオジブリが制作したアニメ「耳をすませば」のモデル地として聖蹟桜ヶ丘が知られています。

特にこの神社は、主人公“月島雫”に同級生の“杉村”が「お前が好きだ」と告白する重要なシーンに登場します。



## 9 観音寺 (相澤伴主の墓)

あいざわともぬし

MAP  
P.3 E



観音寺全景

### ■ 観音寺とは

真言宗豊山派、本尊は聖観音菩薩しょうかんのん ぼさつの木造の座像。関戸地区を中心として、約70戸の檀家だんかがあります。いつ誰が創建したのか詳細は不明ですが、寺伝では、建久3年(1192)に唐の僧が観音像を安置して小屋を立てたことがその始まりとされています。慶長14年(1609)に没した増繁げんきゆうが、慶長3年(1598)にお堂を建てたと伝えられ、さらに天和2年(1682)に没した宥清ゆうせいが初代と数えられています。

明和年間(1764-1772)に、関戸の大火によって観音寺も火災にあってしまい、現在の本堂と庫裏はその直後に建立されたものです。本堂は昭和47年(1972)に鉄筋に改築されています。

宝暦9年(1759)から始まった武相三十三観音第七番札所、多摩川新四国八十八ヶ所第十六番札所、多摩川観音第十二番札所に当たります。

さらに観音寺は、関戸生まれの江戸時代後半の多摩地域の著名な文化人、相澤五流・伴主あいざわ ごりゆう ともぬし(五流の息子)が眠るお寺としても有名です。相澤伴主は関戸の地域伝承を考える上で重要な役割を果たした人物です。

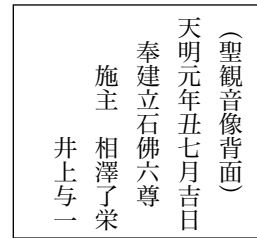
出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』



昔の六観音像



今の六観音像



聖観音像の背面文字

左：観音寺所蔵/パルテノン多摩撮影(『関戸合戦』p.5より転載)

### ■ 六観音

多摩市唯一の六観音像。普通、寺の門前にあるのは六地藏が多いですが、六観音は珍しいとされています。もとは寺域にありましたが、市道が寺域を横切ることになったので、現在の場所に移りました。右から、聖観音しょうかんのん、馬頭観音ばとうかんのん、千手観音せんじゆかんのん、十一面観音じゅういちめんかんのん、准提観音じゆんていかんのん、如意輪観音にょいりんかんのん。右端の聖観音像の背中には、文字が刻まれています。施主の相澤了栄せしゆ あいざわりょうえいは、五流の父に当たる人物です。

### ■ 相澤五流・伴主の功績

五流(1746-1822)は、三多摩最初の狩野派地方画家で、多摩郡で初の法眼位ほうげんを獲得した絵師です。関戸村の名主も務めました。



相澤伴主

その息子の伴主も、同じく関戸村の名主を務めました。伴主の功績で最も著名なのは、「允中流」という生花の流派を築き、三多摩に初めて生花を導入したことと、『調布玉川惣画図ちようふたまがわそうが』(多摩市指定文化財)を製作したことです。『調布玉川惣画図』には、関戸の名所がふんだんに取り入れられており、伴主の郷土に対する意識がうかがえます。



調布玉川惣画図(多摩市指定有形文化財)

図：多摩市教育委員会から提供

また、文政2年(1819)から天保7年(1836)にかけては、「関戸旧記」を著し地域の史跡や伝承についても関心を寄せました。

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』

# 10 徳川家康と「御尊櫃御成道」

## ■ 関戸を通った「御尊櫃御成道」

天下統一を果たし、260年の江戸時代の基礎を築いた徳川家康は、元和2年（1616年）4月17日午前10時頃、駿府城で亡くなりました。享年75歳。神号は東照大権現。

徳川家康の遺言により、亡くなった後のお身体は久能山東照宮に納め、葬儀は芝の増上寺で営み、一周忌後に日光東照宮へ分霊されました。久能山東照宮（静岡県）から日光（栃木県）までのルート上に関戸がありました。

柩の移動に付き添ったのは、天海大僧正（寛永寺の創始者）、土井利勝（佐倉藩6万5千石）、本田正純（小山藩3万3千石）、板倉重正（美川深溝藩1万1千石）、秋元泰朝（総社藩1万石）、成瀬正成（尾張藩付家老61万石）、安藤直次（紀州藩付家老55万石）、中山信吉（水戸藩付家老22万石）。



日光東照宮

隊列は騎馬300騎、雑兵1,000人で、当時は豊臣家の残党が存在したため、ルートは秘密とされ、大街道は避けたと言われています。

### コラム

#### 徳川家康御尊櫃休憩所（金山大権現）



徳川家康の遺言により日光東照宮に分霊するため神柩を移送する途中、関戸から府中に行く際に多摩川の河止めに逢い、一行は一泊したとの言い伝えがあります。

その記念に、小さな祠（金山大権現）が建てられました。

石祠は、徳川家康が祀られている日光東照宮の方向（北）を向いて設置されています。



## 徳川家康の棺を移送した時の行程表

日付	出発	宿泊所	距離	
元和3年 (1617年)				
3月15日	久能山（静岡県静岡市）	東照宮	35km	
15日着	吉原（静岡県富士市）	善徳寺御殿泊		
16日発	//			
16日着	三島（静岡県三島市）	三島大社 2泊	22km	
18日発	//			
18日着	小田原（神奈川県小田原市）	小田原城 2泊	35km	
20日発	//			
20日着	中原（神奈川県平塚市）	中原御殿 1泊		
3月21日発	中原	※相模川 渡河 宗仲寺 休憩	44km	
↓	厚木（神奈川県厚木市）			
↓	座間（神奈川県座間市）			
↓	木曾（東京都町田市）			
↓	小野路（東京都町田市）			
↓	貝取（東京都多摩市）			
↓	<b>関戸（東京都多摩市）</b>			
↓	府中（東京都府中市）			
21日発				※多摩川 渡河 府中御殿 2泊
3月23日発	府中→喜多院大堂（川越市）→忍城（行田市）			合計 301km
4月4日着	→惣宗寺（栃木県佐野市）→薬王寺（栃木県鹿沼市）→日光山輪王寺（栃木県日光市）			
4月8日	奥院、岩窟に安置			

# 11 「聖蹟」の由来

MAP  
P.2 **A** **B**

## 明治天皇の御幸と聖蹟桜ヶ丘

明治天皇の御幸（ぎょうこう・みゆき：外出のこと）は、多摩川流域において地名や地図に記憶されています。

聖蹟桜ヶ丘の「聖蹟」とは、明治天皇が、4回も うさぎがり 兎狩や あゆりよう 鮎漁で御幸されたことから付けられたものです。ちなみに聖蹟桜ヶ丘という名は京王線の聖蹟桜ヶ丘駅についている他は地名にはありません。

現在、御幸の拠点となった連光寺村御陵場は都立桜ヶ丘公園となり、そこには旧多摩聖蹟記念館（昭和5年（1930）建造）があります。



旧多摩聖蹟記念館



旧多摩聖蹟記念館内の  
明治天皇の騎馬像

なお、多摩川での鮎漁は、ながらがわ 岐阜長良川と違って舟上から鵜を操るのではなく、かちうかい 「徒歩鵜飼」といって歩きながら鵜を操るのが特徴です。

多摩川ではアユが多く、大正8年（1919）頃から昭和16年（1941）頃まで、大河原付近（今の関戸3丁目付近）では鵜飼が盛んに行われていました。この鵜飼には明治天皇、大正天皇、昭和天皇、各皇族方も楽しまれました。

一般の人々は都会から京王電鉄の府中駅で降り、人力車または徒歩で多摩川まで来ました。

鮎漁の最盛期には関戸の渡しの乗り場近くに（現在の関戸2丁目）『料亭・井上亭』があり休日になると15艘の屋形舟は息つく暇がない

多摩市教育委員会所蔵／パルテノン多摩撮影（『みゆきのあと』p.94より転載）

ほど忙しく、花火の打ち上げもありにぎやかに宴を張る人などがおり祭りのようでした。鵜が取ったアユやハヤは料理船で料理し、屋形舟のお客に賞味してもらったとのこと。



昭和5年（1930）  
京王電車沿線名所図絵  
パルテノン多摩所蔵

昭和初期に描かれた  
京王線沿線の絵地図です。

（上図を一部拡大）  
昔の聖蹟桜ヶ丘周辺 →



### コラム

#### 宇宙を旅した「宇宙桜」を都立桜ヶ丘公園内に植樹

日本全国各地の桜の種を市民と子供たちが採取し、2008年11月スペースシャトル「エンデバー」がその種を搭載して宇宙に飛び立ちました。その後、この種は、国際宇宙ステーション内にある日本の実験棟「きぼう」に移され宇宙の旅を行い、2009年7月、宇宙滞在259日、地球を4,100周した花の命・桜の種が無事地球に、若田宇宙飛行士と共に帰って来ました。これは、(独)宇宙航空研究開発機構（JAXA）と有人宇宙システム(株)（JAMSS）との協働で実施され、宇宙から帰った種が再び芽吹き花咲く姿を見守り、命の美しさを学ぶ「宇宙桜」プロジェクトです。

多摩商工会議所では、多摩の市花である「山桜」の保存と共に、この「宇宙桜」プロジェクトに参加しています。宇宙を旅した日本全国各地の桜の苗をお分け頂き、現在、5種類を都立桜ヶ丘公園内に記念植樹し、成長を見守っています。

写真・文章 出典：多摩商工会議所 HP「多摩桜プロジェクト」より一部抜粋



都立桜ヶ丘公園  
（ゆうひの丘）内の  
「宇宙桜」の醍醐桜

## 12 明治大正昭和期の皇室と多摩川の鮎漁

多摩川は、鮎あゆの最大の消費地である江戸から近く、比較的鮮度が高いまま運ぶことが可能だったため、鮎漁が盛んに行われました。

江戸時代には、多摩川付近の村々に幕府から鮎じょうのうの上納が命じられることもあり、大量の鮎を捕獲するために、様々な漁法・漁具が発達しました。



打網漁の様子（多摩川鮎漁場絵はがき）  
多摩市教育委員会保管富澤家文書／パルテノン多摩『みゆきのあと』p.49より転載

明治24年の統計では、多摩川での鮎の漁獲高は利根川、相模川に次ぐ3位。全国では18位で有数の鮎漁場でした。

### ぎょうこう ぎょうけい ■ 行幸※・行啓※・・・主な皇族の鮎漁見物

明治14年(1881) 6月 2日	明治天皇他
明治18年(1885) 9月 22日	昭憲皇太后(明治天皇后)
明治20年(1887) 8月 21日	嘉仁親王(大正天皇)
明治20年(1887) 10月 3日	英照皇太后(孝明天皇女御)
明治43年(1910) 7月 18日	聡子内親王(明治天皇第九皇女)
大正2年(1913) 8月 7日	裕仁親王(昭和天皇)

複数回行啓した皇族・・・	嘉仁親王(大正天皇)	9回
	閑院宮載仁親王	3回

※行幸・・・天皇が皇居を出て、他所に行くこと。

※行啓・・・皇太子や皇后等が各地へお出かけになること。

- 明治41年(1908)6月7日 嘉仁親王 行啓の折、多摩川で漁獲された鮎が昼食でどのように出されたのかが分かる日記から「塩焼き」「フライ」「付け焼き」「酢味噌」などが調理されたことがわかりました。お休み所として富沢家(連光寺)が使用されました。

- 明治天皇は連光寺への行幸は、兎狩りが3回、鮎漁が1回の計4回ありました。

### ■ 玉川氷商会・・・氷製造会社が存在した

明治19年(1886)から水を多摩川から導水し、氷池は337坪あり、製氷規模は180tありました。

当時の多摩村は東京府に編入される前で、製氷販売許可証は神奈川県が発行したものでした。

漁獲された鮎は、府中や八王子に運ばれ、特に皇室に運搬される鮎の鮮度保持のために氷は貴重でした。

### ひむろ ■ 氷室跡・・・氷を貯蔵するための倉庫

旧保養院(現・桜ヶ丘記念病院)の南側の多摩丘陵の崖の一部をくり抜き「室」にして、中に氷を入れ、ワラやおが屑で覆い扉をして天然の冷蔵庫にしました。

夏に取り出した氷は、半分になっていたそうです。

### ■ 料亭「井上亭」・・・ 関戸2丁目3番地

昭和12年(1937)に関戸橋が完成するまで、多摩川の交通手段は、船で渡る「関戸の渡し」のみでした。



鵜飼(井上亭) 多摩市役所秘書広報課所蔵／パルテノン多摩『写真で綴る多摩100年』より

渡しに行く堤防の少し手前の旧鎌倉街道添いに、料亭「井上亭」がありました。

多摩川の鮎漁が最盛期の頃は、鮎料理を目当ての遊興客などで賑わったものです。



## 13 地名と屋号から見る関戸の関・宿・市

『関戸文書』(有山文書)(多摩市指定文化財)によると、戦国時代の関戸には、関銭<sup>せきせん</sup>を徴収する関や、商人や参詣者<sup>さんげいしや</sup>を泊める宿があり、さらに月に6回、市(六斎市)も開かれていたことがわかりました。現在の関戸には、これらに関する伝承地名も残されています。

### ■ 宿に関する地名「本村」「宿平」

『新編武蔵国風土記稿』には「本村」「宿平」という地名が登場し、「宿が置かれた場所」という記載があります。現在も関戸地区では区域を上・中・下に分けて、「上宿」「中宿」「下宿」と称することもあります。

また、「だいもん(大門)」「こまや(駒屋)」「なかじゆく(中宿)」など門や馬を想起させる屋号、「かのうや」などの宿屋の屋号もあります。

### ■ 市に関する地名「古市場」「市場口」

市に関する手がかりはあまり多くはありませんが、関戸の南方(現在の市役所付近)は「古市場」と呼ばれてきました。また、一ノ宮の付近には「市場口」という地名が残されています。

### ■ 関所の監督者たちに関する地名「有山」「佐伯谷戸」

関戸の有力者・有山源右衛門<sup>ありやま さえきやと</sup>の家は、子息・新右衛門<sup>しんえもん</sup>の代で断絶してしましますが、東寺方付近には「有山」と呼ばれる一帯があり、ここが当時有山家の屋敷のあった場所と考えられています。また、関所の番人であったと伝えられる佐伯氏の居館があったとされる「佐伯谷戸」という地名も残っています。



井上正吉「昭和初期の関戸宿地図」(『郷土たま』5号、1986年)掲載図および『多摩市史通史編1』、『多摩市の町名』をもとに作成。

パルテノン多摩作成(『関戸合戦』p.34より転載、本図作成時の参考文献名は図内に記載)

## 昭和初期の関戸宿周辺の屋号

昭和初期の関戸宿周辺の、屋号・通称の一覧です。



左の地図内の建物□の番号←と、右表のNo.→と、照らし合わせてご覧ください。

前ページの一部拡大図

No.	屋号・通称	氏名	No.	屋号・通称	氏名
1	木曾免(井上亭)	井上	39	たろさん	
2			40	りょうさん	
3			41	なかむら	中村
4	まんじゅうや	竹内	42	さかなや	青木
5			43	かのうや (本家)	中村
6	さあさん		44	なべや (分家)	中村
7	洋服屋	田中	45	しんたく (分家)	
8	さださん		46	酒や	相澤
9	のぶさん	城所	47	こまや	
10	きそめん	小料理屋	48	ばくろう (本家)	
11	てっこうさん	井上	49		
12	めかいや	横倉	50	だいもん	若林
13	べんちゃん		51	ひがし	
14	はなや	森田	52	ひがし	
15	ちゅうちゃん		53	ぶんさん(中宿・本家)	小山
16	やま		54	しんや	
17	延命寺	宗派/時宗	55		
18	とばのさんや(分家)	小林	56	いせや	藤井
19	おくのさんや	小山	57	おおや(本家)	須藤
20	三平ばくろう	持田	58	いかげや	鈴木
21	大川屋	小山酒店隣地	59		
22	すみや(本家)	相澤	60	はんどさん	
23	せいき	井上	61	だい(本家)	相澤
24	上のみち		62	てっさん	
25	あいがたや	河原地区/お茶屋	63	くるま(分家)	川久保
26	たかみ(分家)	小山	64	ようふくや(分家)	小形
27	すしや(本家)	小山	65	ひがしどなり(本家)	鈴木
28	たばこや	中村	66	かみだいじん	
29	観音寺	宗派/真言宗	67	みせ(分家)	岬
30	みせ	小山	68	かじや	
31	しんこうや(本家)	福井	69	さかした(本家)	岬
32	けいど(分家)	小林	70	やと	井上
33			71	かみ	
34	たけさん	小山店の本家	72	水車	川久保
35	へいさくさん	小形	73	はっちゃん	
36	しも		74	いんぎょ	
37	うのさん		75	とめさん	
38	いしばし	小形	76		

出典：パルテノン多摩 2007『関戸合戦』P.34 をもとに作成。

## 14 関戸の渡しと関戸橋

MAP  
P.3 

### 関戸の渡しと関戸橋

川に橋を架けることは、近代以前では大変難しく、江戸時代の多摩川では、船による『渡し』を利用して人・荷車・馬などが川を行き来していました。現在、橋が架けられている地点の多くは、古くから交通の要所であり、関戸橋付近においても『関戸の渡し』がありました。

『関戸の渡し』は関戸と中河原<sup>なかがわら</sup>を結ぶ鎌倉街道の渡し場で、関戸村の経営するものを関戸の渡し、中河原村の経営するものを中河原の渡しと呼んでいたようです。現在でも、関戸橋北詰の近くには、中河原渡し碑が設置されています。

昭和12年(1937)の関戸橋(現在の下流橋)が架かり、『関戸の渡し』は廃止されました。まだ高度経済成長期での交通量増加に伴い、昭和46年(1971)には、上流側に関戸橋(新橋、現在の関戸橋)が整備されました。



関戸の渡し(関戸橋の開通で廃止された)

### 多摩市にかかる橋～関戸橋と府中四谷橋～

昭和後期、多摩川中流部には車の通れる橋が5つしかなかったため、橋に車が集中し、大変な交通渋滞が発生していました。増大する交通需要に対応するため、橋梁の整備を進め、現在では多摩川中流部の橋は9つまで増え、交通渋滞は大幅に改善されることとなりました。

多摩市には、「関戸橋」と「府中四谷橋<sup>ふちゅうよつやばし</sup>」があり、関戸の渡しに代わる現代の多摩川横断手段となっています。



府中四谷橋

### 関戸橋の架け替え工事

関戸橋は多摩川を横断し、多摩市と府中市を結ぶ重要な橋です。

関戸橋は昭和12年(1937)に完成した下流橋と、昭和46年(1971)に完成した上流橋の二つの橋で構成されています。そのうち下流橋は、架橋後80年近く経過しており、老朽化に伴う諸課題を解決するため、架け替えが必要となりました。架け替えは約16年もの年月をかけて行われます。



昭和12年当時の関戸橋(下流橋)  
(現在架け替え工事中)



昭和46年完成の関戸橋(上流橋)

参考:「関戸橋通信 vol.1-3」、東京都北多摩南部建設事務所(2015-2016)  
写真:「多摩市史」から引用

### 架け替え工事に伴う環境保全対策

関戸橋周辺の河原にはカワラノギクなど貴重な動植物が数多く確認されています。このため、工事の影響範囲に生息または生育している貴重な動植物を保全するため、環境保全対策を実施しながら、工事を進めています。



カワラノギク

#### <環境保全対策の例>

- ・希少な動植物を工事エリア外へ「移動・移植」
- ・鳥類の営巣環境を確保するため「代替巣<sup>だいたいそう</sup>を設置」
- ・動植物、魚類等の「継続的な調査」
- ・工事中の対策として、「バッファゾーン(希少動物の侵入防止帯)を設置」

出典:「第5回 多摩川流域歴史セミナー資料(2017)」多摩川流域懇談会

## 歴史の散歩道 番外編

### 多摩川と関戸

#### ●大正期から昭和期への多摩川

大正時代になるとコンクリートの骨材としての利用が盛んになり、多摩川の砂利も利用されることとなります。特に大正12年(1923)に起きた関東大震災の後には復興需要により、川砂利の生産量は急増します。この頃の多摩川の砂利採掘の中心は、立川から稲城あたりの中流域でした。これは下流域がすでに取りつくされたためです。大正時代末期頃からは、大型の掘削機や機械船が利用されるようになり、砂利の採掘から選別、洗浄までの作業が一貫してできるようになり、砂利業界の機械化、合理化が進みました。

#### ●砂利運搬としての鉄道の発達

砂利の採取は鉄道の敷設とも深い関係がありました。稲城周辺の地域で砂利採取・運搬を目的として敷設された鉄道を列挙すると次のようになります。

大正9年(1920)に設立され、昭和2年(1927)に川崎-大丸間が開通した多摩川砂利鉄道(のちの南武線)、大正5年(1916)に調布-多摩川原間の営業がはじまった京王電気軌道(のちの京王線)の多摩川原線、大正11年(1922)に中央線の武蔵境から是政までが開通した多摩鉄道(のちの西武多摩川線)、明治43年(1910)に国分寺-下河原間の営業がはじまった東京砂利鉄道

(国鉄下河原線)などがあります。敷設された時期をみると、いずれも明治時代末期から昭和初期にかけての、わずか20年たらずの間に建設されており、これらの鉄道は昭和4年(1929)にはすでに完成していたこととなります。敷設された鉄道の位置をみると、南武線、京王線、中央線を軸として、そこから釣針形に分岐する支線が多摩川に向かってのびている様子がわかります。

このような砂利採掘の機械化と鉄道の敷設による大量運搬の実現によって、多摩川の砂利採取は大正末期から昭和初期の時代にかけて最盛期をむかえます。しかし大量の砂利採掘は多摩川そのものにさまざまな悪影響を及ぼします。護岸堤防の破壊、河床面の低下による農業用水の取水難、水質汚濁による漁業に対する悪影響などがあげられます。これに対応するために、昭和9年(1934)以降は、二子橋より上流、日野橋より下流の地域では高水敷での採掘は不許可になり、許されるのは低水敷だけとなりました。

#### ●砂利採掘による公害

戦後になって、昭和20年代(1945~)には戦後復興が徐々に進み、多摩川の砂利採掘も、ふたたび戦前の活況を取り戻しはじめました。しかし乱掘による砂利公害も進行したために、日野橋から下流の多摩川について、昭和27年(1947)には「多摩川砂利採集取締りに関する協定」

が締結され、規制が強化されることとなります。昭和30年代(1955~)に入ると規制はさらに強化され、昭和39年(1964)には青梅市の万年橋までの商業的な採掘が全面禁止になります。翌昭和40年(1965)には多摩川全域で全面禁止になり、砂利採掘の歴史は幕を下ろすことになりました。

※引用参考文献「稲城市史 下巻/稲城市の民俗(4)」

### 大栗川と関戸

#### ●大栗川とは

大栗川は、流路延長約15.3km、流域面積約42.6km<sup>2</sup>の多摩川水系の一級河川です。八王子市鎌水に源を発して東流し、同市堀之内で大田川と合流し、野猿街道(府中相模原線)沿いに流下して多摩市に入った後、流向を北東に転じて多摩市連光寺で乞田川を合流して、多摩川に注いでいます。



乞田川との合流点上流の新大栗橋下流端から多摩川合流点までの約1.1kmは国土交通省の直轄管理区間で、その上流部が東京都管理区間です。



整備前・整備後の護岸の状況

#### ●大栗川の流域

大栗川の流域は、かつては準農村地帯であり、大栗川や乞田川など河川沿いの低地部、谷戸部に江戸由来の村落が点在していました。

低地部は、大栗川や乞田川からの

利水や、谷戸を流れる湧水による水田耕作を行っていました。丘陵地のほとんどは山林であり、植林地が少なく、薪炭林ないし原野で占められていました。

#### ●大栗川の河川整備

大栗川は、昭和40年代(1965~)から始まった多摩ニュータウンの開発と併せた改修が行われました。

当時、治水機能を最優先し整備を進めたため、河道は直線的で、護岸はコンクリートの張りのブロックと、人工的な河川となりました。また、管理用通路から川側に入る施設もないため水辺に近づくことが困難な状況でした。

現在、護岸整備が完了してから30年以上が経過しており、張りブロック護岸の老朽化や河床の先掘が著しく、その対策が課題となっています。

このため、河川環境を緑豊かな河川空間に再生することを目的に、東京都では、平成21年度より緑化及び親水整備工事を実施しています。

整備方針として、緑化工事に合わせ老朽化した護岸を再整備して安全性を確保するとともに、親水性の確保の向上を図っています。

出典:「第5回 多摩川流域歴史セミナー資料(2017)」多摩川流域懇談会